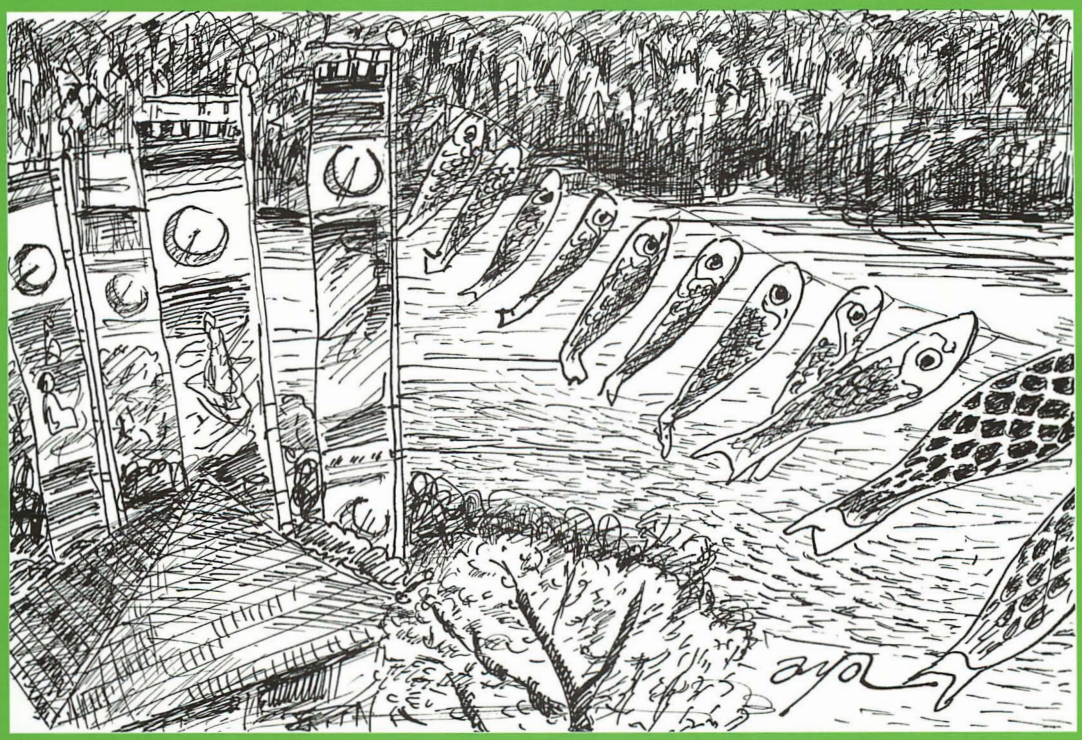
まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 52



野村町　鯉のぼり

特集　交流と連携をめざすまちづくり

―芸術・文化の薫るまちづくり―

- 子規博その交流と連携
- 内子座に遊ぶ職人集団
- 宇和文化の里
- 人が来る町、もどる町
- 紙の文化と歴史のロマン

アングル
21世紀に向けて180度の発想を …愛媛県農業会議 21世紀えひめ村づくり推進協会会長／岡本　要……1

特集 交流と連携をめざすまちづくり

―芸術・文化の薫るまちづくり―
子規博その交流と連携……松山市／長谷川孝士……2
内子座に遊ぶ職人集団ー内子座社中ふれだいこ……内子町／安川　徹……4
宇和文化の里ー拓かれた町づくりを支えたのは人…宇和町／大竹　忠盛……6
人が来る町、もどる町ー瓦のふるさと菊間ー……菊間町／黒田　和美……8
紙の文化と歴史のロマン……川之江市／大西　堯……10

論談―まちづくり―
情熱に勝もの成し……鹿児島県鹿屋市夢来研たかくま会長／伊野　幸二……12

キラリ光るまち
ゆとり体感インアロマティック石見… 石見町香木の森クラフト館／高橋三保子……14

リレーでちょっトーク
仲間と共に… ……瀬戸町／三好　要……16
私の大好きな島……宇和島市／中尾とみえ……17

研究員レポート
バレンタインツアーin湯布院……稲田　紹……18
えひめ地域づくり研究会議「'96年度フォーラム」レポート……大谷　基文……20

地域を生きる
地質を通したまちづくりにかかわって……城川町／高橋　司……22

風おこしのちかい
まちづくりセカンド・ステージ
「地域政策研究会」起動の提言……渡辺　浩二……24

Information
媛のくにフラッシュ〈今治市・菊間町・中山町・大洲市・肱川町・松野町〉……26
平成9年度事業計画……29

特集〝交流と連携をめざすまちづくり〟

今号のテーマ　芸術・文化の薫るまちづくり

最近、「交流」とか「連携」といった言葉をよく耳にするようになりました。交流とは、異なる地域の人や物が互いに行き来することであり、連携とは、それぞれが、意識的に連絡し協力することをいいます。

まちづくりにおいても、地域の活性化を目指し個性ある交流拠点の整備が進んでおりますが、その魅力を充分に発揮していくためには、地域間がお互いの機能を補完し合うネットワークの形成を図り、広域的な交流や、積極的な連携を強めることが重要となっています。

そこで、本年は特集のメインテーマを「交流と連携をめざすまちづくり」としました。

また、今号のサブテーマは、「芸術・文化の薫るまちづくり」におき、今日の潮流である余暇の増大や知的ニーズの高まりとともに、心の豊かさを求める人びとの行動に対応して、地域に根ざす芸術・文化をテーマに特色ある交流を展開しているまちづくりについて考えてみることにしました。

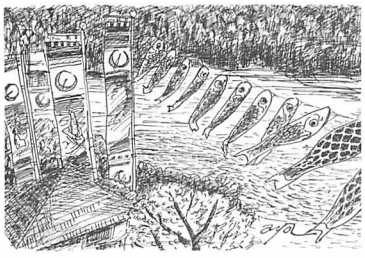
（編集子　井上）

表紙の言葉

海には程遠い野村町。しかし、大洲市、肱川町、城川町、宇和町、広見町、三間町、小田町、柳谷村、河辺村、高知県梼原町、と隣接する数は多い。山間の川沿いを走っても、各方面に抜ける道路案内も多いです。やっと辿り着いた野村ダム。

県下一多い鯉のぼりは、各家庭から寄せられた数。ダム両岸から雄大に泳いでいます。

柳原あや子



野村町　鯉のぼり

『21世紀に向けて 180度の発想を』

愛媛県農業会議
21世紀えひめ村づくり推進協会
会長 岡本 要

「考えを
直せば
ふっと出る笑い」
前田伍健作

この句は、松山は道後の川柳の達人、前田伍健先生の代表作と言われているが、私は時々慶び事があるとき、少しの反省・振り返りを強調するとき、スピーチの冒頭に使わせてもらっています。

しかし、この句が生まれたのは昭和二十年初夏、松山市街が焼夷弾の空襲で一面焼野原になったとき、呆然自失の状態から立ち直る心の襞を句に表現したものと言われており、如何なる状況にあっても失意に沈むことなく、新たなる活力を自らが取り戻せるすばらしい人であり、常に客観的に自らを見つめる人生の達人でもあったように思われます。

このことは少し置いて、私方の県農業会議は、市町村農業委員会と連携協調して農地の転用を抑えながら、適正な利活用の方向へリードする仕事や、農業経営の安定と農産物自由化阻止を柱とする農政活動が主とした業務でありましたが、しかし、このところ農地は外圧の心配よりも内なる崩壊の心配が深刻となってきたし、一方の農産物輸入自由化阻止運動もウルグアイラウンド農業合意で最後に残ったコメについてもミニマムアクセス受け入れによって、全面解放の方向へ一歩踏み出したように思います。

かつての価値観が、国際化の大海原の中では霧散してしまい、新しい事象に付いて行くだけでも相当に「考えを直してみる」努力が必要になってきたと思いますし、何よりも発想の転換が生まれる土壌である「自由な考え」を身に付けたいものであります。

平成二年には農業会議に、農村活性化機構として「二十一世紀えひめ村づくり推進協会」が設けられ、いわゆる「むらづくり・まちづくり」を円滑に進めるため、地域に根ざした活動を支援することとなりましたが、また、今年からは、地域興しマイスター派遣事業が委託されるなど支援活動が強化されつつあります。

ところで、地域興しは大分県の一村一品運動と、竹下総理のふるさと創生資金支援がきっかけとなって多くの成功例をみました。しかし、中山間地域ではあまりにも多くの解決すべき課題がありますし、これらの解決は、囲碁や将棋の対戦と同じく、経時のなかに身を任す余裕も必要とする、一方、徳島県上勝町が実施している「農地を大事にしない村の若者達よりも、農地や農業や自然を大切に考える都市生活者を選んで施設農林業を勧める」事業によって成功をみています。

むらに多様な考え方をする人々の、新しい血が導入されることに重点を置かれているとのことであり、まさに発想の転換と言うべきでしょう。

百八十度転換の時代を変革の時代といわれてますが、このような発想が出来ると考えるだけで笑みがこぼれ、冒頭の前田伍健先生の[考えを 直せば ふっと出る笑い]に繋がるような気が致します。

特　集

交流と連携をめざすまちづくり

—芸術・文化の薫るまちづくり—

『子規博その交流と連携』

ー正岡子規のふるさと観を原点としてー

松山市立子規記念博物館
館長　長谷川孝士

正岡子規は松山市のみならず愛媛県にとってかけがえのない先人であると思う。子規記念博物館のテーマは、その看板どおり正岡子規であり、とくに「人間子規」を最重要のテーマとしている。

その子規に「故郷」という記事がある。以下抄出してみよう。

世に故郷程こひしきはあらじ。
花にも月にも喜びにも悲みにも先づ思ひ出らるゝは故郷なり。
故郷は學問を窮め見聞を廣くする地にあらずされども故郷には歸りたし。故郷は事業を起し富貴を得る地にあらずされども故郷には住みたし。
…
まず、このような書き出しで、健康な精神性が保有している普遍的なふるさと観が説かれている。続いて、自らのふるさとの風物や人びと、それも五感で取らえたふるさとのなつかしさにふれながら

母親の乳房と故郷の土とははなれうきものなめり

と述べ

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

と結論している。子規ほどのリアリストがと、意外なほどの結論であるが、智識や理屈の及びようもない宇宙の必然的真理を、自らの病状によって経験しなければならなかった子規ならではの結論であろう。

子規記念博物館における「まちづくり」と言い「ふるさとづくり」という場合は、子規の、右に述べたような精神性を具体的に表現することである。

現代において、子規のようなふるさと観を持っている若人がどれほどの割合でいるであろうかという懸念はある。一見観念的でリアルな方針ではないという向きもあるかもしれないが、「まちづくり」を効果的効率的に展開しようと思えば、その意識（コンセプト）をどう決定するかということが必須要件となる。

「まちづくり」を外部に向かって、つまり交流と連携の願望をもって展開するとなると、まず内部での意識統一が必要である。そして、その意識は外部に向かって誇れるものでなければならない。内部の人びとの誇りに思うものでなければ、外部との交流も連携も発生し得ない。リアルきわまりない経済原理は、精神世界の内にも厳然として働く。一過性の流行はあって

展示風景

母八重と子規

たことも、先見性のある措置であった。じつはこれも「写生」を作句の根源とした子規の意識に依ったものではあった。

子規記念博物館は市民や児童生徒の要望に応じるに止まらず、ビジターやその分野の専門家の要望にも応じる機能を保有して資料真蹟主義をモットーとし、またその展示においては、次の「三ない」を遵守している。

一、実物資料との対面に余分な既成概念を入れない。

二、単なる知識の押し売りはしない。

三、偏狭な文学解説はしない。

この方式は、プル方式の展示と言われ、目的をもって展示資料を観賞しようとする人びとを意識した方法である。簡単にいえば、みる人を引き込む展示とでもいうのであろう。過去において難解だと批判され、迫力に欠けるとも批評された。現在でもそういうお言葉をいただくことがあるが、プッシュ方式の展示、つまり、どうだ素晴らしいだろう、よくみなさい。というような押し付けるような方法は、文学系の博物館にはそぐわない。観賞する人びとに、常に新しい創造を促すことこそ肝要であると思っている。俳句一句にしても、多くの人の多様な解釈と観賞の中から、普遍的なそれが構築された例に依る。最近、文学系の博物館の数もご多分に漏れず増加して、全国で一〇〇館はあるといわれているが、真蹟重視、プル方式の館の方に人気が傾いているようである。

博物館相当の施設が、「交流と連携のまちづくり」に参画するとなれば、常に博物館の主題に関する資料を収集しこれを整理保管し、調査研究を重ね、普及活動を展開していかなければならない。言は易く実行となると大変な仕事である。市レベルの博物館となると、研究職的態度の学芸員は落ちこぼれてしまう。かつてある職員が名言？　を吐いた。「学芸員は学者ではない。まして芸術家でもない。素材（資料）を知り抜いていなければならないという意味で、あえて言えば職人であろう。ひるがえって考えるとき、それでこそ、学芸員としての寄って立つ瀬があろうというものである」と。

いずれにしても「交流と連携のまちづくり」には、周到な用意と厳酷な覚悟が、まず要求されるであろう。

幸い子規記念博物館は、松山市民、長年の念願により開設されたもので、内部的統一意識は火の出るようなエネルギーを秘めた揚句の施設であった。その主題とする正岡子規は、近代俳句、近代短歌の父として、また現代文章語の開拓者として不朽の名声を有する郷土の先人で、うたがう余地もなく全国に誇り得る文人である。俳句の分野では世界的価値観も形成されようとしている。

従来、文人を主題とする施設にあっては、図書館的機能を重視した施設が多くあったが、あえて博物館的機能を発揮すべく計画されも継続はしないのである。

松山市立子規記念博物館

特　集

交流と連携をめざすまちづくり

―芸術・文化の薫るまちづくり―

『内子座に遊ぶ職人集団』

―内子座社中ふれだいこ―

内子座社中ふれだいこ応援団
安川　徹

昭和六十年に修理復元された内子座は、内子町においては町並みと並ぶ重要な観光スポットであるが、この古い芝居小屋の復元により町並み保存とは別な面白い効果を町にもたらした。

それは内子座を使い芝居、落語、音楽などを自ら招きプロモートする集団がいくつか出来てきたということである。また、プロモートだけでは物足りない人は役者となりアマチュア劇団を旗揚げした。これは、内子座のような芝居小屋の魅力が舞台がそこにあるとジッとしていられない人種の気持ちを喚起して良い形が出来上がったのだなと想像している。

内子座は、今時空調設備の無い施設にも拘らず良く使われている。内子のような場所に住んでいて普通では見られないような芝居等が楽しめるのはなかなかの快感である。

レトロな手作り公演用ポスター

このような内子座で行われる公演を支えているのが前述のプロモート集団であるが、その中でも特に精力的でユニークな存在は「内子座社中ふれだいこ（代表　高田武則）」である。

この内子座社中ふれだいこは、内子町と五十崎町の有志が昭和六十二年に発足させたものである。発足から多少の出入りはあるがメンバーは六名、三〇～四〇代の商工業者で構成されている。昭和六十三年四月に坂本長利を招いて「土佐源氏」の公演を打ったのを最初にこれまでに東京演劇アンサンブル「櫻の森の満開の下」、渡辺美佐子「化粧」など県内ではなかなかお目にかかれない芝居を年に一～二回のペースでプロモートしてきている。

この「土佐源氏」の公演を行うにあたり、彼らが内子座らしい何か印象に残ることは出来ないかと思いついたのが、手漉き和紙にシルクスクリーンで印刷をした独特のポスターの作成である。彼らのメンバーの中に手漉き和紙職人の西岡芳則氏がおり、商業デザインを手がけたことのある山田清昭氏が存在したことが、このアイデアの契機にもなった。和紙のシルクスクリーンのポスターと言っても作業はガリ版刷りの原始的なものなので、一枚一枚和紙をおいてス

大正期の芝居小屋　内子座

クリーンを合わせインクを置き、へらで刷るという大変な作業の代物である。さらに色の数だけ同じ作業を繰り返すという長時間の作業の末に出来上がるポスターである。このポスターを彼らの主催する公演のたびに二〇〇枚～三〇〇枚という単位で作り続けてきたのである。

しかし、この山田氏のデザインする切り絵のようなレトロなポスターへのこだわりは公演をする役者の評判となり、多くのマスコミに取り上げられ彼らの活動の格を大きく高めることになったのである。ポスターの作品は、彼らが主催の公演以外にも引き合いが相次ぎ作品の数は四〇数点にもなり、今ではこのポスター展が各地で開催されるなどそれだけで大きな魅力を持ったものになってきている。

「化粧」(渡辺美佐子主演)をプロモート

また、内子座社中ふれだいこ主催の公演の特徴としては、正規なルートで芝居の公演を頼むのではなく、あくまで彼らと役者との交流の中で実現しているということにある。内子座のような場所では劇団が公演を行って満足な興業収入をあげることは難しい。それは、収容人員が少ないことと、地域的に高いチケットではお客が集まらないということである。

そこで、彼らは役者・劇団と直に話し合い公演に必要な経費を考えて貰っているが、役者も金銭抜きで内子座の舞台に立ってみたいという人ばかりなので、その辺はスムーズにいっているようだ。その替わりに彼らはポスターを刷り、芝居の道具の搬入搬出を手伝い、役者と一緒に打ち上げをするという協同作業を行うのである。また、旅館の経営者であり代表の高田氏が劇団に特別料金で宿を提供し、彼自らが腕を振るった食事でもてなすという裏の努力もあるのである。

このような役者と彼らのごく普通の付き合いが次の公演のアイデアを生んでいるのでもあり、役者と同じ立場で公演を盛り上げてきているのである。

今では彼らの方から公演を持ち掛けるのではなく、彼らの評判を聞いた役者の方からこんな良い芝居があるが内子座で実現出来ないだろうかと相談が先にあることが多いようだ。

彼らの活動の原点は、内子座のような芝居小屋でそれに相応しい道楽が実現できないかということである。そこには地域文化の向上や芸術の振興などという気負いはなく、そのことが彼らの活動を気持ち良いものにしているようだ。

また、内子座だけの活動に留まらず、彼らが劇団や役者の窓口替りとなり、県内の他の団体に公演の実現を呼びかけるなど活動も行ってきている。

来年は、結成して十年を迎えるが、これに向けて密かにある企画が進行中である。それは、彼ら自身が役者となり内子座の舞台で芝居を演じるというものである。この企画には悪役商会の八名信夫が関わって現在シナリオの作成に取り組んでいるということだ。どんな芝居が出来上がるかは見てのお楽しみであるが、役者との交流がまた彼らの活動に幅を広げてきているのは確かである。

今年は、五月十五日に野川由美子とダンプ松本の二人芝居と十一月には悪役商会の公演が既に決定しているようである。機会があれば是非とも内子座での芝居を楽しんでいただきたいものだ。また、内子座社中ふれだいこ謹製の和紙とシルクスクリーンのポスターの魅力も見てもらい、彼らの道楽ぶりを感じていただきたい。

特集

交流と連携をめざすまちづくり

—芸術・文化の薫るまちづくり—

『宇和文化の里』

—拓かれた町づくりを支えたのは人—

宇和町先哲記念館
館長　大竹忠盛

昭和四十八年、開明学校、申義堂、江戸時代の家並みが残る中町（なかんちょう）周辺が「宇和文化の里」として、愛媛県から選定を受けた。

宇和文化の里の特徴を探りながら宇和文化の里を紹介する。

その柱が、開明学校（三月二十一日答申、国重要文化財）である。原点は申義堂であり、明治二年に当時の郷人達の教育に対する情熱が、「郷校（ごうこう）」としてその期待に応え、建築されたものである。後に明治十五年に新築されたのが開明学校である。当時は、フランス風のモダンなその校舎が珍しく、見学者が絶えなかったといわれる。

又、開明学校創設に至るまでの、宇和の歴史的背景には、蘭方医として活躍した二宮敬作、同じシーボルトの高弟である高野長英、日本初の蘭方女医の楠本イネ等、我が町ゆかりの先人達の足跡がある。そして彼らの生きざまは、永々として今日に受け継がれている。

江戸時代の古い家並が残る中町、今も酒醸造として生かされている本多邸をはじめ、今尚そこに人が住み古い家並はすっかり暮らしの中にとけ込んでいる。現在、電柱のセットバック工事が行なわれている。「舞たうん」発刊時には、中町の景観も一層整備されているだろう。

「宇和町先哲記念館建設と文化の里振興課の設置」

多くの偉業を残した先哲を顕彰し、その心に学び次代文化の礎となるよう、又、生涯学習、芸術文化振興の拠点として、昨年の五月に先哲記念館がオープンした。それより一足早く、文化の里全体の活性化と各施設の管理運営、県立歴史文化博物館との連携を視野に、平成七年十月に、文化の里振興課が誕生した。昨年の四月からは、先哲記念館内に文化の里振興課の事務所を設けた。

この課の業務の基本は、文化の里全体の振興を町の活性化に結びつけることにある。開明学校、歴史民俗資料館、民具館、米博物館の管理運営、中町の町並み保存と活用、さらにこの四月からは観光係、国際交流部門も加わり、歴史と観光両面からの活性化が求められている。

「宇和郷土文化保存会とボランティアガイド」

宇和文化の里が今日あるのは、郷土の先達の歴史に対する理解の深さと、「文化財を守らなければ教育の土壌は育たない」という思いがあったからである。開明学校の保存運動、宇和町の教育史料の収集、くらしの歴史を物語る民具の収集等、郷土の先達の尽力は大きい。この大切な文化を今の私達が受け継ぎ守り育て活かさなければならない。そのためには、行政の枠を超えた支えや協力が必要である。そのひとつが今活躍していただいているボランティアガイド

である。十九名の会員で、古い町並の案内、文化の里の施設の案内をしていただいている。開明学校の重要文化財指定で、訪れる人が増加している文化の里には、欠かすことのできない支援組織である。

「宇和シーボルト協会、UWA国際交流協会」の支援

宇和町先哲記念館のオープン記念行事として、シーボルト生誕二百周年記念事業を開催した。この事業の内容を紹介する。先哲記念館の展示室で行なわれた「シーボルト生誕二百周年特別展」。ドイツの方々と宇和町民の交流を深めた「晩餐会」。シーボルト・イネについて専門家の立場から語っていただいた「シーボルト・イネ顕彰サミット」。日本初の女医である楠本イネの功績をたたえ、大先輩へ一筆その思いを寄せて下さいという企画で、全国の女医さんに呼びかけた。「イネへのメッセージの募集」。発見された小惑星に「シーボルト」と名付けた命名式。シーボルトの子孫であるツェッペリン氏や米山彰氏にも来町していただき、盛大に行なわれたこれら一連の事業は、ドイツと宇和を結ぶ友好の証となり、国際化時代に対応した活力ある町づくりに、必ず実を結び花開くものと確信する。

シーボルト家の二百年展

この記念行事の成功は、宇和シーボルト協会の支援なくしては語れない。シーボルト協会は、ドイツシーボルト博物館のオープン式典に参加した町民で結成されたもので、シーボルト星の誕生に尽力された東京理科大教授の池田先生を含め、二十七名の組織である。女医さんメッセージ募集の宛名書きからサミットの準備など細かい裏方の仕事から、資金面でのご支援等シーボルト会の人達の大きな支えがあったからこそこの大事業が成功したといえる。

又、ドイツと宇和町の交流の架橋となり、盛上げていただいたUWA国際交流協会の存在も、この宇和町にとってかけがえのないものである。

「中町を守る会と環境整備」

古い町並みを守り育てようと結成された「中町を守る会」も、大きな行政支援組織である。家並み修復の議論、今回の電柱のセットバック事業等、行政と住民をつなぐ重要なパイプ役として、今後の町並保存運動にとって欠かすことのできない組織である。

〝組織は人なり〟というが、まさに町づくりは人づくりでもあり人と人との結び付き、絆の大切さをしみじみ感じている。

「おわりに」

文化の里が更に花開くためにどう対応するか。今迄記述した組織の方々との連携強化はもとより、更に他の関係機関との連携や支援協力が大切であると思う。

文化の里の一角に建設された愛媛県歴史文化博物館には、藤岡副館長を初めスタッフの方々にご支援いただいている。又、宇和郵便局の碓井局長による一連事業のPR、愛媛新聞社の宮内支局長による適切なアドバイス。季節の花を届けて下さったり、周辺の清掃に協力して下さる町民の方々。……これら多くの人達の支えの中で、「文化の里」が今後文化財を守り育てるだけでなく、文化財を生かした町の活性化に向けて、職場の仲間と共に歩みたいと思っている。

開明学校（国重要文化財指定へ）

特集

交流と連携をめざすまちづくり

—芸術・文化の薫るまちづくり—

『人が来る町、もどる町』

—瓦のふるさと菊間—

菊間町窯業協同組合
事務局　黒田和美

—はじめに—

「菊間瓦」は鎌倉時代、弘安年間から七〇〇年余りの長い歴史の中で育まれた伝統と技術を現在に伝え菊間町の地場産業として今もなお多くの人々が活躍しています。「いぶし銀」に輝く菊間瓦は、明治十七年皇居御用瓦として納入した栄光や、愛媛県伝統的特産品にも指定されており、その品質と技術は他産地とはちがって、「鬼師」「役物師」「地平師」と呼ばれる職人達によって受け継がれている「匠」の技にあるのです。一般住宅をはじめ神社仏閣や城郭の復元など幅広く使用されており、全国でも高い評価を得ています。

瓦楽焼のいろいろ…

—建築様式の変化—

数十年前までは、この近郊で家を建てるなら「屋根は菊間瓦」としたものでした。ところが現在では住宅情報の多様化の中で、洋風建築や二世帯住宅などが多くなり粘土瓦を使った和風建築が少なくなり屋根に対する関心が薄くなってきているのが現状です。

—子供達と瓦粘土細工—

「瓦の町」の子供達に、いつまでも「土の感触とものづくりの喜び」を覚えていて欲しいと願って、昭和六十二年に始まった小中学生による「粘土細工コンクール」も今年で十一回目となりました。毎年テーマを決めて、鬼面や動物、置物などを「瓦」と同じ粘土で製作して業者の協力で焼きあげるのです。どの家にも子供達の作品が残っています。我家にも花好きの私にと作ってくれた植木鉢や壁掛け鬼があります。最近では、今治や近隣の市町村の小学校からも粘土細工を子供達に体験させてやりたいと問い合せも多くなりました。すでに実施した学校にはとても喜んでいただきました。

—瓦のふるさと公園—

現在、菊間町ではJR菊間駅の東側に「瓦のふるさと公園」を整備中であり、その中核施設として瓦資料館「かわら館」が建設されています。歴史的な瓦や多くの資料が展示されます。町外の人達にも、より理解を深めていただきたいと思っています。公園内には沢山の瓦を使った建物や歩道があります。その中でも今年の粘土細工コンクールでは、子供達も公園づくりに参加しようと言う事で、一～四年生は粘土板に自分の顔、魚・鬼面などを彫り込み、これをタイル状に敷き子供達の作品の歩道が出来ます。五・六年生は一人が一枚製作を受持ち、合作で二メートル角の壁画をクラス全員でつくりあげました。「お供馬」「鬼まつり」「みかんとり」「時計台」「霧合瀧」「浜ひるがお」行事や自然

「壁画づくり」みんな真剣です

をテーマにしています。子供達は原画を書き、これを、並べた粘土板の上に写しとり、粘土を盛りつけてゆき、ヘラで削ったり、指に水をつけヒビ割れが生じない様に水なでをしたりと、大奮闘でした。形も大きさも初めての試みだったので、子供達はもちろん先生方も関係者もとても心配でした。でも子供達の粘土をさわっている時の目の輝き、弾んだ声を聞き、最後に一人一人の名前を書き込み「できたよ！」と歓声があがる。拍手がおこる。そしてみんな笑顔です。とても感動しました。

菊間の子供達は毎年粘土に親しんできたので、この大作を前にしても物おじしないで挑戦できたのだと思います。今まで継続しているのは、指導の先生方や関係者の援助、業界の協力等も忘れてはならないと思います。今回も指導役として瓦業界の後継者達も参加して、仕事とはちがった「瓦づくり」にとても真剣に取りくんでいました。公園がオープンする頃には展望時計台の近くに敷きつめられます。みんなで完成を楽しみにしているところです。何年か経て、この壁画の前でクラス会の記念写真を撮ったり、また「土の感触を」想い出して欲しいものです。

ー屋根からおりた瓦ー

建築様式が変化して、屋根に対する（瓦に対する）認識が薄れてきている様に思います。そこで「瓦」を身近に置いて、その良さを感じていただきたいと思い「屋根からおりた瓦」・「瓦楽焼」を紹介したいと思います。

三年ほど前から後継者たちを中心に瓦粘土で花器や和皿、土鈴などを作っています。「いぶし銀色」に野の花がとても似合って好評なんですよ。瓦楽焼（がらくやき）とは、「瓦粘土でつくる楽しみ」「我がつかって楽しむ」我楽焼ということです。花を生けたり、和菓子や果物を置いてみたりペン立てに使ったりと同じ形の物でも使う人の発想で楽しんで欲しいと思っています。そして菊間瓦が四季おりおりの変化が美しい日本の風土にマッチして、とても住みやすい屋根材である事を再認識していただきたいと願っています。

ー交流の場・かわら館ー

菊間町では平成五年五月に瓦業界をはじめ町あげてのイベント「'93かわらぬ愛・菊間」が開催されました。この時には「全国鬼師の会」（京都近江町が事務局）の全国大会も同時に行なわれ、シンポジウムや、全国の瓦産地の代表者が訪れパネルディスカッション等もありました。

「鬼瓦」をつくる職人を鬼師と呼びます。全国鬼師の会では、毎年一回開かれるこの研修大会で、古来よりの伝統を保持し、お互いの技術の向上をはかり、後世へ伝えていく後継者を養成してゆく為に意欲的に取りくんでいます。

「かわら館」が全国への「瓦」の情報発信地として、又、地場産業として、いつまでも魅力ある「ものづくり」を伝承してゆく事ができるように人々の交流と学習の場となる様に、幅広く活用していきたいものです。

そして「人が来る町」粘土細工をした子供達が「もどる町」菊間町であるように、たくさんの人々との出会いを大切にしていきたいと思っています。

「敷瓦」の製作

特　集

交流と連携をめざすまちづくり

—芸術・文化の薫るまちづくり—

『紙の文化と歴史のロマン』

紙のまち資料館
館長　大西　堯

川之江市の概況

川之江市は、法皇山脈の中央を流れる清流金生川の豊かな水と、山間部に成育する楮や三椏を原料に、昔から隣の伊予三島市と並び良質の和紙を生産する町として栄えた。今日では、その種類は和紙・洋紙・各種紙加工品・不織布・機能紙等多彩で、特に、水引製品は、質・量ともにすぐれ、全国的にも高く評価されている。

「紙のまち資料館」はJR川之江駅から徒歩約十五分、高速インターチェンジから車で約一〇分の所にある。

四国の紙資料館

四国には「阿波和紙伝統産業会館」(徳島県山川町)、「いの町紙の博物館」(高知県伊野町)、当館の三館がある。

それぞれの館には特色があり、「阿波和紙伝統産業会館」は、日本の和紙工芸家や外国の和紙愛好家等に親しまれ、工芸的な和紙作りをめざしており、宿泊施設も備えている。入館料は有料である。

「いの町紙の博物館」は観光客が中心で、全国ネットで紙工芸作品を収集展示し、入館料は有料である。「紙のまち資料館」は不特定多数の方々を対象としており、年間三万人が訪れている。入館料は、できるだけ多くの人々に交流の場を提供する目的で無料にしている。

資料館の設立目的

紙文化を核とした地域おこしをめざし、次の三つの理由で設立された。

一、暗いイメージの払拭

とかく、川之江市は今まで外部から公害の町というイメージで見られており、市民もそう思っていた。そこで、まず市民自らが、我まちに誇りを持てるよう、紙を文化面から観る姿勢を創出する資料館としてつくられた。

二、紙の大切さの再認識

今、私たちの身の回りには紙があふれているが、昔は大変高価なものであった。紙を大切にするという事を生活文化面から啓蒙活動を行うことを目的とした。

三、川之江の認識度を高める

当館を交流拠点として、紙を素材とした種々の講座開設や、手漉き体験を通じて紙に親しむファンの育成をめざした。その結果、年間入館者も三万人台を復活し、利用者の割合は、市民三、市外七となり、このことからも、自然に地域間交流が深まっている。その結果、川之江の認識度を高める役割を確実に果たしている。

活動内容

一、魅力の紙講座

水引細工、ペーパーフラワー、はり絵、創作和紙人形、手漉き和紙、幼児と遊ぼう紙工作、絵手紙等各種の講座が開設され多くの人が集まっている。その中でも、水引細工講座が人気が高く、大阪、広島から通ってくる人もあるほどである。年数がかかるが、五年間くらい学べば、なんとか、人に教えることが出来るようになる。例えば、そんな受講者が、その技術を持ち帰り、主婦を対象に水引細工の教室を開いてくれれば、そこで川之江の紙文化を伝える事ができ、新たな交流が生まれるはずである。

ちぎり絵のグループは、伊野町

の紙の博物館の展示会へ参加して交流を深めている。

二、手漉き体験コーナー

手漉き体験室では、子供から大人まで手軽に、自分だけの手作りはがきや短冊、色紙等を漉くことができる。この体験室は西条地方局管内の新任教員の研修や紙関係企業の初任者職員研修にも利用されるほか、近県を含めた学校や各種団体等々にも利用され、紙に関する知識を学び紙文化に触れる機会を提供している。これらの活動によりリピーターは着実に増えている。

三、特別企画展

文化的欲求に応えるため変化に富んだ企画展に心掛け、年間一〇回程度開催している。例えば、全国の張り子を一堂に並べてみると、島根県の張り子玩具の衣装が、最も中国、韓国の衣装に似ており、この地方がいち早く、大陸文化の影響を受けていたことが一目瞭然に分かるほど興味深い企画展になった。

全体としては、平素は目にふれることの少ないものを意図的に選び企画している。

四、紙講座生徒の作品展

紙の工芸品展、趣味のちぎり絵展等は、当館に協力する人や講座受講生の日頃の成果発表の場になり、文化意識の高揚につながった。新しい試みとしては、草木の繊維を染色し、スプーンで絵を描く「漉き絵」と名付けた作品づくりもある。

開館一〇周年記念事業

開館して一〇年目を迎え、節目の年として次のような事業を計画している。

一、日本列島絵手紙発信展

全国より絵手紙一〇、〇〇〇点の募集を目指し、その内の優秀作品八〇〇点を館内に展示する。又、全国の郵政局と連携して、北海道から沖縄まで、一四～一五カ所の郵便局で、入選作品一五〇点を持ち回り移動展として展示し、絵手紙を通じた交流の輪を広めることとしている。

二、紙まち体験ツアー

見て、触れて、飲むの五感に訴える事をキャッチフレーズにして、八月中に市外より一〇〇人を招き、手漉きはがきの製作、水引工芸・手漉和紙、紙のリサイクル（再生パルプ）の現場見学等を行い紙文化に触れ、その後、最近ブームの地ビールで交流を深めようとする企画である。今後も、地元の製紙、清酒、旅行会社と連携して実績を重ねていく予定である。

将来展望

一、当館運営には、遊（あそぶ）、学（まなぶ）食（たべる）の三つの条件が必要である。そのためには、今後、食事・宿泊施設等を備えた総合施設の建設が望まれる。

二、全国的な工芸品分野の情報ネットワークを確立し、お互いに連携を強めながら情報交換・収集に務めたい。

三、企画展示品の充実をはかるため、それぞれの館が所有する収蔵品を貸しあうような貸与制度を提案し検討したい。次から次へと展示資料も増え手狭になったので、スケールの大きな施設が必要である。又、四国の各館が連携して、その違いやイベント等を楽しみながら観て回るコース等の設定を考えたい。

四、機械化の進む中、紙の原点を忘れないためにも紙文化の交流・連携に努め、紙の産地どおしを結んだりもしてみたい。今後、紙だけでなく、県内の異文化をどう繋げるか（例えば砥部焼きとのジョイント等）が今後の課題である。

五、ケナフ（某製紙会社で試験栽培中の密殖可能で僅か六カ月で成長する植物）の繊維を活かしてパルプ化、製品化が進んでいる。非木材繊維を活かした新しい取り組みについても学習出来るコーナーの設置を図り、地球の環境問題についてもふれていきたい。

以上の事が実現されるよう、今後も交流・連携を基本理念として、紙文化の薫る「紙のまち資料館」づくりを目指したい。

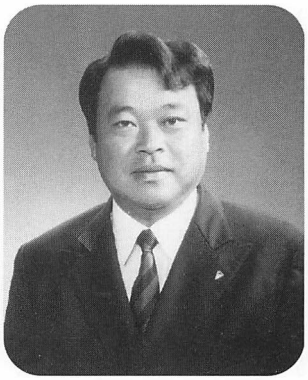
紙講座ペーパーフラワー教室

手漉体験（はがきづくり）

論談――まちづくり――

情熱に勝もの成し

鹿児島県鹿屋市下高隈町
夢来研（ムラケン）たかくま
会長 伊野幸二



『過疎という現象は人がいなくなる事ではなくて、その町に住む住民の心がすさんで無気力になった時に初めて過疎が始まる』

私の住む鹿児島県鹿屋市の高隈地域は昭和三十年当時、人口五千四百八人、時の流れと共に都市への人口流出が続き、現在は半減以下の二千五百人を割り、さらには高齢化率が三十％を越える、まさに過疎の進行地域です。又、各集落ごとに自治運営がなされていますが、六十歳を越える高齢者のみの集落が出始め、集落合併が余儀なくされているのが現状です。

こうした地域は日本のあちこちで見受けられるようになって来ています。ふるさと創生事業が実施されると共に、各地でおらが村をアピールし様々な町おこし、村おこしを展開する地域が増えてきました。皆さん、どの地域でも、自分たちの住む町を良くしたい！住み良い地域をつくりたい！など、目標は同じだと思います。又、それぞれの地域が何らかの危機感を持っているからこそ、そういった運動が始まるのは言うまでもありません。

昭和四十九年鹿屋市を含む周辺十町の火葬場が高隈地区に地域住民の反対運動を押し切り建設されたのを皮切りに、鹿屋市のゴミ焼却場、産業廃棄物処分場、犬ネコペットの火葬場など次々にすべての最終処分場が建設されました。そのようなマイナスイメージが増える背景を黙って見ていられなくなると同時に、子供たちが将来この地域から消えて行きそうな気持ちでいっぱいになりました。何とかしなくてはと気のあせりを感じつつ、地域に住む若者に「自分たちの住むふるさとを皆んなで考え、もっともっと住み良い地域をつくりましょう」と、一人ひとりに声を掛け五十五人のメンバーを集め、村おこしグループ、地域に夢を来させる研究会〝夢来研（ムラケン）たかくま〟を一年かけて発足させました。

「失敗を恐れては何も出来ない。夢に向かって進むにはつまずきもある。みんなの力を、知恵を結集すればきっと素敵な夢を実現できる」を合言葉にメンバー五十五人で毎年、何十回となく会を開き、様々な事業を展開しています。

夢来研たかくまの発足当時は、今まで地域おこしとか、ボランティアなどかかわりを持ったことのないメンバーがほとんどでしたし、今の世の中は、生活も豊かになり何不自由なく暮らせる時代になり、自分さえ良ければといった考えの人が増加してきています。人の為、世の為を考えてくれる（地域づくりの出来る）メンバーをど

長野での講演　夢マップたかくまを中心に

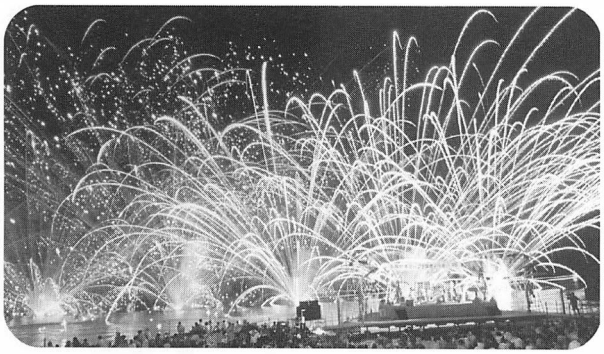
のようにしてつくりあげるかが大きな課題でした。メンバー一人ひとりの、気持ちを一つにする為の手段として、とにかく**皆んなで取り組める事業をやって見ることが先決**と言う結論が出、地域資源を活かし国営第一号で出来た畑地かんがい用ダム（大隅湖）を利用して地域住民を参画させてのサマーフェスティバルを開催する事になったのです。企画に資金集め（行政からの補助は一円も頂いていません）、会場作りとやること成すこと全てが初めてで、おまけに大隅湖は高隈地区の集落から七～八キロメートルの人里離れた山奥でしたので、地域の住民からは批判が出て、大変な思いをしての取組みでした。いよいよフェスティバルの開催日。メンバー全員が観客が来てくれるか?不安でいっぱいでした。結果は、地域住民の四倍以上の一万人を越える観客で会場は入場出来ない人が出るほどの盛況ぶり。クライマックスの九州一を誇る大隅湖大ナイアガラの滝（花火）に火が点灯され、ナイアガラが湖上に写しだされたとき観衆のどよめきが最高でした。その時メンバーのほとんどの目が、感激の涙でいっぱいでした。メンバーの涙には色んな意味が込められていたと思いますが、その時が本当の夢来研たかくまの誕生だったのかも知れません。又、国営のダム（農林水産省財産）を使用する為、許可申請に行って出先機関で却下され、そこであきらめず、中央省庁の農林水産省まで直接折衝に行き、大隅湖の使用許認可のみでなく、水辺環境整備事業の資料まで説明をいただき、市、県を説得し、現在それも十億八千万円を掛け事業実施されるに至っています。

　ほんの一回のサマーフェスティバルの実施で私たちは、色々なすばらしい貴重な体験を沢山する事が出来ました。このようにして一つの事業を通じ、メンバーの**皆んなが同じ土俵に上がってくれた**のです。メンバーの地域に向ける気持ちも一丸となって何事にも真剣に考えてくれるようになりました。

　一方、大隅湖畔には県の事業で建設されたアジア太平洋農村研修センターもあり、一年を通じて東南アジアを中心に様々な国から研修生が訪れます。夢来研たかくまを中心に国際交流もホームステイ等を通じ活発に行っています。そのような素晴らしい交流の施設も整備され、先ほど述べたサマーフェスティバルも、現在、研修生なども参加していただけるようになり、国際村サマーフェスティバルと名前も新たにし地域内外より大好評を得る事業と成っています。

　そのほか、様々な事業も実施していますが、地域の活性化に何が最も大切かを考えると、やはりその地域に住む住民が、**自分たちの住む地域に誇りを持ち、そして一人でいきる人生と、皆んなで生きる人生の違い**をそれぞれが明確に考えて見ることが大切だと思います。人生と言うスタンスで地域を捕らえて見たら、きっと素敵な自分の行動が示されるのではないでしょうか。夢来研たかくまが誕生して六年になります。発足当時は何も変わらない地域のようでしたが六年を経過した今、着実に地域が明るく住み良い町に変わる様子が目に見えてきています。さらには、子供達から高齢者までコミュニティーの輪が広がり住民それぞれが、ふるさと高隈に誇りを持ってくれるように成りました。

　最後にふるさとを持つ喜びと、生まれたところで生活でき、生まれたところで生涯を終えられ、高隈に火葬場のあるおかげで、生まれたところで灰に成れることを幸せに思いつつ、愛媛の〝まちづくりの出来る人づくり〟が拡大されることを期待いたします。



国際村サマーフェスティバル水中花火

キラリ光るまち

ゆとり体感インアロマティック石見

島根県石見町
香木の森　クラフト館
主任主事　高橋三保子

石見町は、島根県のほぼ中央に開けた盆地状の高原地帯で、高齢化の進む過疎の町です。人口は、六千八百人余りと減少の一途をたどり、高齢者人口の比率は三十％を越え、その率も年々高くなっております。

農村の暗いイメージを一掃し、都市と農村を結ぶ交流人口の増大を図り、側面からUターンやIターンへの動機付け支援の起爆剤とし、情報発信するために企画したのが、平成五年にスタートした「ゆとり体感インアロマティック石見事業」です。都会に住む自然志向や田舎志向の若い独身女性に、一年間石見町で農村体験をしませんか？　豊かな自然の中でゆとりや創る喜び、田舎ならではの人のふれあいを体感してみませんか？と呼びかけました。応募者は、四年連続六人定員に対し全国から七十人位の申し込みがありました。応募の作文は、「自然の中で自分を見つめなおしたい」「時間に追われる都会の生活を変えたい」「自分を高めたい」「田舎で暮らしてみたい」など様々です。都会の人たちが求めている貴重な価値が農村にはあるのですね。

クリエイティブスタッフという名の石見町民として彼女たちは、「香賓館」と呼んでおります宿泊施設で共同生活をします。

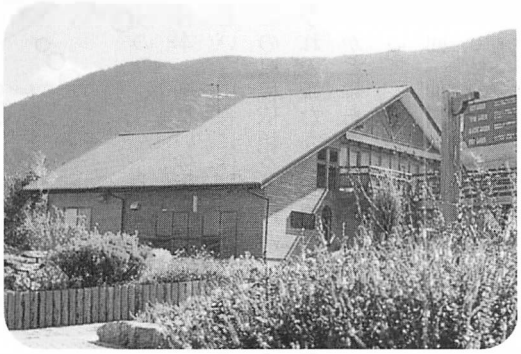
クリエイティブスタッフには、滞在費として月七万円が、町から支給されます。彼女たちは、香木の森を中心に様々な体験をします。グリーンハウスでの土づくりからハーブ栽培やハーブガーデンの維持・管理。クラフト館の工房では、ハーブや自然素材などを使ってクラフトをします。ポプリやリースなどの壁飾り、すべて香木の森で創った手作りのオリジナル製品です。郷土料理の講習会やハーブを使った調理実習、自然の草花を利用してのフラワーアレンジ、家庭菜園もやっています。ほかには、自主体験の日を週二日設け、それぞれ自分たちのテーマに沿った活動をします。実際に農家や有機農業実験ほ場へ出かけて行き農業体験をする人、保育所・授産所・老人ホーム等で福祉の体験をする人など様々です。クラフト館で更にクラフトに専念する人、ハーブ栽培の研究をする人もいます。香りグッズの全国コンクールで特別奨励賞を頂くなどクラフト館ならではの活動もしています。私たちが一番望んでおりました地域交流も活発で、地元のイベントや祭り・スポーツなどに積極的に参加し交流も深めております。私たち事務局サイドはできるだけ関与せず、彼女たちの意志に任せています。農村生活が初めての彼女たちにとって、四季を通じてすべてが新たな体験なのです。

香木の森　ハーブガーデン

当初、全国でも例のない若い女性を集めたユニークさで脚光を浴び、マスコミの取材が続きました。色々な形でマスコミに取り上げられ彼女たちも悩んだ時期がありましたが、自分たちの思いを自分たちの言葉で伝え、本来の姿や活動内容、香木の森の四季折々の様子を知ってもらうためミニ広報紙を全戸配布することを提案してみました。「いわみんカモミール」と名付けたこのミニ広報紙によって、地元の人たちとコミュニケーションが図れたと思います。二期生・三期生・四期生もこの「いわみんカモミール」を引き継いで

くれ香木の森と地域とをつなぐ架け橋となっています。

さて、気になりますのは滞在期間を終えたクリエイティブスタッフですが、香木の森のスタッフとして、私たちと共に仕事をしている人が四人おります。郡内七ヵ町村で組織する「邑智郡広域振興財団」でプランナーとして活躍中の人、地元の酪農青年と結婚してお母さんとなり、しっかりと石見町に根付いた人、一旦は都会に帰っても里帰りと言いながら度々顔を見せてくれる人、手紙や電話で近況報告をしてくれる人。何よりもうれしいのは、巣立っていった彼女たちが実家に帰るように、クラフト館へ立ち寄り元気で頑張っている顔を見せてくれることです。

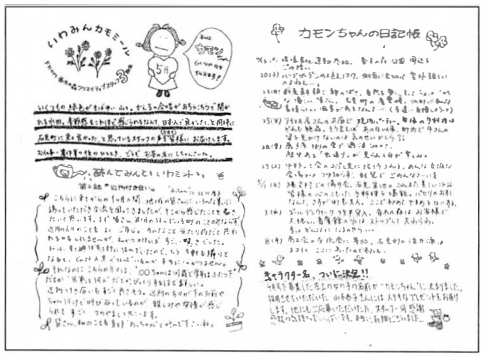

クラフト館

緑豊かな自然の中で、ハーブを通して新たな出会いのあること、素晴らしい仕事をさせてもらえることに幸せを感じています。四季折々に変化する「香木の森」ハーブガーデンは、私のエネルギーの源と言えるでしょう。彼女たちを通して、自分の生まれ育ったこの町を見直し再認識できたこと大変うれしく思っています。「緑がきれいで自然がいっぱいの石見町はステキ！」とは、よく聞くことで誰でも言うことなのですが、何がステキかと言えばやはり「人」「人」だと思います。都会と違ってプライバシーがあってないようなものですから、考えようによってはとても窮屈です。私自身も石見町で生まれ石見町に育ちましたので小さな時から周りは知ってる人ばかり、どこに行っても「どこそこの誰それちゃん」と呼ばれ、その煩わしさがとても嫌で、いつか石見町を離れて暮らしたいと思っていた私も実は、Uターンの再就職です。煩わしい人とのつながり、めんどくさいと感じていた地域行事も、自分が楽しんでしまえばそれなりに楽しいことなんですね。彼女たちがよく言うことには「この町には自分自身の存在感がある。」「都会では気付くことのなかった新しい自分を見つけることができる」とも言います。

このゆとり体感事業が、「香りの町石見町」「香木の森公園」のイメージを広く定着したと思われます。高速道路へのアクセス道路が開通したこともあり、現在では年間二十万人近い観光客が訪れる場所になりました。

この事業を通して、都会にない価値観や町の誇りを再認識したり、町をPRする事によってUターンのきっかけにもなり、まちづくりも新たな方向が見えてきたと思います。過疎対策に緊急性が問われている今日、決して確かな人口増加策といえないものの、石見町が各方面に情報発信できたこと、これにより入り込み客が増加したこと、ハーブの特産化に向かいつつあること等少しづつではありますが効果が現れたのではないかと思います。

何もかもが、試行錯誤の中で進んできたこの事業ですが、町では今後、香木の森を中核としたふれあい総合農園の整備促進・ハーブの特産化や特色ある公園の充実を図り、若者の働く場、定住の場の確保など次なるステップについて検討中です。石見町の豊かな自然や、温かい人情を大いに発信し、何度となく訪れてもらえる人々を増やし新しい風を吸収しながら、香りの町づくりの一助になればと思います。



ミニ広報紙　いわみんカモミール

「仲間と共に・・・」

瀬戸町
三好　要

『舞たうん』をご愛読のみなさんこんにちは。私は、日本一細長い佐田岬半島の瀬戸町という田舎に住んでおるものです。この原稿依頼を受けた時は、あこがれの舞たうんの輪！にでれるやんかと舞あがってしまいました。

さて、そろそろ本題に入ります。今回「仲間と共に…」というテーマで私の青年団活動を熱く語っていきます。私と青年団との衝撃的な出会いは、地元瀬戸町に就職が決まった十年前になります。地元での生活に、不安とあきらめの思いがいっぱいの中、「青年団やってみんかな」との誘いがあり、青年団？なんやら消防団や暴力団みたいなんかとドキドキでした。そこには、なんと瀬戸町の若者がワイワイガヤガヤと集まっているのです。毎月定期集会を行い、自分たちのやりたいこと、地域行事への取組み、なんといっても会の後の飲会がメインであります。飲んで、歌って踊って時には喧嘩もし、時には燃えるような恋をし、自分たちの悩みや社会・地域の問題や矛盾について、朝まで語りあったものです。

そして、活動の中で三つの大きなドラマがありました。一番目は二十一才の時、「なんか面白いことやろうや」から始まったクリスマスパーティーでした。ゼロからのスタートで団員全員でぶつかり合いながら、毎日夜遅くまで準備をしました。保育園児を集めたり町内外から若者百人を集めたりしてパーティーは盛大に開催されました。その中で、私は「なかなか瀬戸町も捨てたもんやないな。」仲間と共に作り上げていく楽しさ、感動がそこにあったのです。二番目は、二十六才の時、「なんか大きなこと、思い出に残るようなこと」という思いの中、瀬戸町でミュージカル公演に取組んだことです。「いなかにミュージカル？」から始まったこの企画は、事務所を開き、広報活動でテレビの生放送にも出演、毎晩〈〈各地区へ足を運んで「楽しいお芝居が来ますけん」とチケット販売にと町中を走りまわったものです。公演当日には、なんと町民の約半分の一千二百人の観客で満杯となりました。その中で、若者が本当に真剣にぶつかればなんでもできる。まちを動かすことができる。そして、まちを変えることができると確信しました。三番目は、二十九才の時、人生のパートナーである妻との出会い、そして結婚でした。仕事・青年団・地域行事等なかなか二人の時間が合わない中も、いつも温かく私を応援してくれたものです。

本当に早いもので活動も十年目を迎えました。いろいろな出会い・汗・涙・そして感動がありました。戦後の高度経済成長により、物質的な豊かさの中で、地域崩壊の危機、人間関係の希薄化と分断化だと言えます。このような中で、青年団活動が本当に必要な時代にきていると思います。地域をつくっているのは若者であり、地域を変えていくのも若者であります。青年団で出会った多くの仲間と共に、地元瀬戸町からグローバルな視点で何ごとにもチャレンジ&ドリームで取組んでいきます。そして、〝いなか〟だからこそやれることをじっくりと仲間と共に語り合い見つめあい、勇気をもって行動していく覚悟であります。

ご清聴、ありがとうございました。

「私の大好きな島」

宇和島市
中尾とみえ

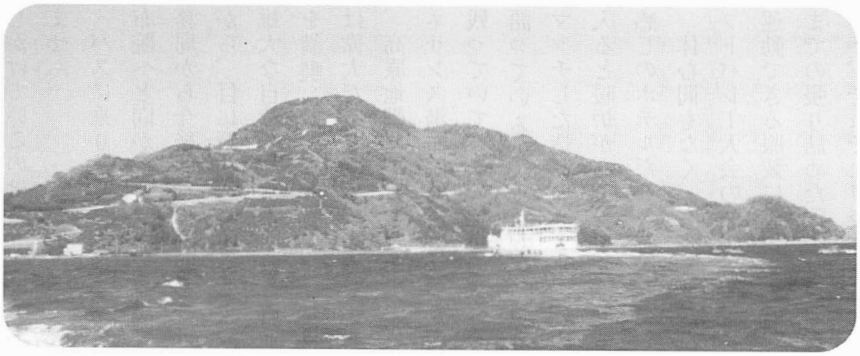
皆さん――。〝九島〟っていう島をご存知ですか。宇和島湾にポッカリ浮ぶ周囲十一キロメートル、人口一、五〇〇人余りのみかんと漁業の盛んな小さな島です。私はこの島で生まれ育ちました。小・中・高校はもちろん、社会人になっても船で通勤する毎日を送ってきました。私は社会人になるとともに地元の青年団に入り活動し、もうすでに十年以上経ちます。心に残っている行事に九島にウィーン合唱団を呼んだこと。これは島中の住民が関心を寄せたイベントでした。ウィーンの人たちと交流し、今までにない天使の歌声は一生忘れません。

他には、私が企画した行事があります。市街地や山村地域の独身女性を対象に島の良さを知ってもらう目的で九島でホームステイを行いました。島に住んでいる女性でも味わったことのないタチウオ漁に出たり、タイ養殖場で餌を与えたり、タイ釣りをしたり、また島巡りをしたりして、日頃の生活の中では気付かない小さな自然をたくさん見付けたことを思い出します。

そんなある時、私に島を離れ生活する機会があり、只今、一人暮らしを始めています。住んでいた頃には分からなかったのですが、離れてみて改めて私はやっぱり島が好きなんだと気付かされます。

私は愛媛県青年団連合会の役員をし、県内の仲間はもちろん全国の青年団や他団体との活動に携わってきました。多くの仲間との出会いの中でいろいろな地域を訪れることがあります。そこで出迎えてくれる人たちは皆、温かでその地域独特の生活が味わえます。そこで感じさせられることは、自分たちの住んでいるまちを住みやすい活気のあるものにするために皆んな一生懸命であること。明るくて魅力ある人が集まっている地域はステキなまちであります。自分が一生住んでいくまちであるならば、やはり楽しくて活気のあるまちであって欲しいと願います。その為には、地域を起こす若い力が必要であります。私たちのこの島でも若い後継者が少なくなり、青年団員がいない状態に陥っています。島の中にはこれといった名物はありませんが、人情豊かでのんびりとした自然がいっぱい残っています。自分たちの育った島だから、また、私の大好きな島だからこそ、もっと多くの方々に島を訪れてきてもらいたいものです。

夕暮れどきの宇和海を一度見に来てみて下さい。きっと、ロマンチックな気分になれますョ。



島民の足となるフェリーと九島の外景

リレーでちょっトーク

ー研究員レポートー

バレンタインツアーin湯布院

研究員　稲田　紹

〈短くて長い別府までの道程〉

テレビの一週間予報で、天候が心配されていたこのツアーも二月八、九日にかけて、好天気に恵まれました。参加者の日頃の行いがいいのか、私の運がいいのか、それとも事務局の運がいいのか…それはそれとして、私にとっても晴れ晴れとした気分で参加できたのはいうまでもありません。

このツアーに参加してみないかという話が突然まい込んできたのは正月明けでした。まちづくりの研修にきている私にとって、湯布院の視察もでき、また参加することにより、良きパートナーを見つけることができれば一石二鳥ではないかという考えが閃きました。

このツアーの目的は主に八幡浜・大洲地区広域市町村圏組合が管内の嫁不足対策を兼ねて行ったもので、圏内外から百名近くの男性、女性が参加しました。

フェリーの待合室での参加者たちの様子を見ると、この二日間で生涯のパートナーとなるであろう〝お嫁さん〟探しに何かわくわくしているようでした。なかには、作戦を練っているのか、じっと一点を見つめている人もいました。

さて、乗船して、待ちに待った女性との対面です。廊下を挟んで男性と女性に分かれ、まず男性から五人ずつ順番（五十音順）に自己紹介をしていきました。かくゆうわたしは、一番最初の順であることは、いうまでもありません。あまり緊張しない性格の私でしたが、思うように自己紹介ができず、少し残念な気がしました。

〝お願いカード〟という運命の紙が配られました。お話をしてみたい相手の番号を書いて事務局にお願いするものです。

各自それぞれ自己紹介していきプロフィール集と照らし合わせながら好みの相手をチェックしていくのです。自分をアピールする人や、簡単な自己紹介をする人もいます。その後で〝お願いカード〟に記入する訳ですが、このカードで結ばれたカップルも何組かできたようです。まだまだ始まったばかり、この後、このカップルたちも、どうなるかは、解りません。やはり相手に自分を売り込むことが大切なのですね。

〈最初の試練〉

二～三時間で別府に着きました。近くの食堂？で各テーブル男女に分かれての食事。緊張の一瞬です。初めて会った男女が向いあって食事をするのですから、無理もありません。いいかえれば、これ程チャンスなことはないのです。この時に自分を売り込む事が出来るか出来ないかに掛かっているのですから。男性、女性なりふり構わず話しかけているのは言うまでもありません。

バスに乗り込み目的地である湯布院へと向かいました。車中で事務局から今後の日程説明を受けながら、目に飛び込んでくる大分の雄大な自然や、整備された町並みを満喫しながら、（やっぱり自然は偉大だ）と改めて痛感しました。

高原地帯にある（高原ホテル「ルネサンス湯布院」）には、雪が所々残っていて、この地帯の寒さを物語っているようでした。自然にマッチした造りのホテルで、中に入ると暖炉があるのです、洒落た感じのホテルだなと感激しました。

休む間もなく、グループ対抗ソフトバレー大会の開始です。各自運動できる服装に着替えると、今までの張り詰めた緊張感が取れたのか、それぞれリラックスしたプレーがみられ、連携をとりながら、和やかな雰囲気になっていました。バレーが終わるとフリータイムで

雄大な湯布院の山々

す。この時間にお目当ての相手と会話をし、自分をPRすることで、今後の展開が変わってきます。椅子に座って二人で会話をするもの、四～五人でスカッシュをするもの、スケートにいく者などなど。大体この時点でカップルが決まっていたといっても過言ではなかったという感じがしました。

私は？というと、どさくさにまぎれて、スカッシュをしました。初めてプレーをしましたが、なかなか体力のいるスポーツです。単独で来たような私にとって、グループの中に入っていくのは至難の技でしたが、なんとか、ひっかかりを見出す事ができました。

いよいよ、本日のメインイベントです。ホテルから二～三分程のバーベキュー会場へと向かいました。ここでは先程〝お願いカード〟に書いた相手の近くに座ることが出来るのです。運よく私もお目当ての女性と向い合わせになることができました。お腹の減っていた私は、目の前のごちそうにむしゃぶりつきました。真向かいの彼女が〝クスッ〟と笑いました。（よーし・つかみはOK）焼肉を食べながら無口な私が会話を弾ませるように努力をしていたところに、なんと二つ隣の男性が割り込んできて、女性の隣に座り込んでしまい、機関銃のごとく次から次へと質問をし始めたのです（何と積極的な人だろう）なんと私は、彼の行動に関心してしまったのです。なんということか・・・

合間、合間に、事務局によるゲームアトラクションがあったり、気の合った仲間で話をしたり、中には、話に入れず数人で固まってじっとしているものなど、色んな風景があちらこちらにありました。

〈運命のわかれ道当日〉

とうとう運命の日がやってきました。めずらしく目覚めの良かった私は、霧の立ちこめた湯布院の山々を見つめ一人呟きました。

「とうとう運命の日がきたな？」柄にもないことを書いてしまいました。各々朝食を済ませ、我々は城島高原へと向かいました。車中、以前事務局から聞いた説明によると【女性からの告白】だということだったのだが、やはり〔男性からの告白にしましょう〕ということになったそうです。もう逃げ出したい気分です、大勢の前で、告白するのですから。

城島高原で最後の昼食、ここで〝お願いカード〟の記入をし、運命が決まるのです。このカードには今までの流れの中で気に入った人を書きます。

いよいよ、フェリーに乗り込みます。男性陣誰もが憂鬱そうな表情を浮かべています。それぞれ男女に分かれて座りますが、緊張のせいか静まりかえっています。

「それではただ　いまより男性から告白をしていただきます」

私の心臓もドキドキ、胸が高鳴ります。

一番の方が告白します。

「〇〇さん、最初から決めてました・・・・・」

「よろしく、お願いします」といって、女性がチョコレートを渡します。一瞬男性の顔が紅潮したかと思うと笑み　がこぼれてきました。成功しました。続いて事務局からの質問責め。

「続いて。二番、稲田さん」

私は立上がり、彼女の名前をよびました・・・・・

結果については、皆さんのご想像におまかせします。

別府にて初めての昼食

えひめ地域づくり研究会議

「'96年度フォーラム」レポート

前研究員　大谷基文

えひめ地域づくり研究会議の『'96年度フォーラム』が、一月二十五日（土）、えひめ共済会館において開催されました。

今回のテーマは、『次代へのプロローグ―地域にくらしのアメニティを築く―』とし、三部構成で午前中からの開催となりました。

第一部は、「新えひめ地域づくり活動支援事業」の活動報告。第二部は、「まちづくり実践塾」と題して、県内外より三名の講師を招いて三時限の講演とディスカッション。第三部は、交流会ということで、意見及び情報交換の場となりました。

当日は、県内各地より会員をはじめ、東雲短期大学の学生、一般参加者ら百八十七名が集まりました。

その模様を報告いたします。

第一部　「新えひめ地域づくり活動支援事業」活動報告

第一部では、「新えひめ地域づくり活動支援事業」活動報告として、三団体より活動報告がなされました。

最初に、玉川町地域づくり研究会「源流」より、「炭による水質浄化」への取組みとして、里山を覆っている竹や雑木を利用し、リサイクルできる生活はできないかと考え、竹や雑木を炭にして生活排水をその炭によって浄化し、再びその水を樹木育成のために利用するシステムづくりについて報告がなされました。

つづいて、久万町菅生（スゴウ）中組愛護班は、「大宝窯による木炭づくりと河川の水質浄化実験」の取組みとして、久万中学校科学クラブの生徒たちと連携して、久万町産の雑木で木炭を製造し、網袋などに詰めて小河川や用水路・下水等に埋設及び敷設することにより、水中に含まれる汚濁物質及び雑菌が木炭炭素構造に吸着され、また副次的なバクテリアによる微生物分解を増殖させることによって、汚泥及び汚濁物質の除去が可能となり、相当程度の河川等の水質浄化が実現できることが証明できたとの報告がなされました。

三崎町さきがけ橘塾は、地域資源を活かした活動として、「青石」にこだわった石のシンポジウムを開催してきた。そして、住民による住民のためのまちづくり活動の拠点、地域の声の発信地となるようにと「青石の公園」づくりに、三年計画で取組んでいる活動状況が報告されました。

第二部　まちづくり実践塾

第一時限目は、医療・福祉の面から、愛媛医療生活協同組合専務理事の冨長泰行さんを講師に、「一人は万人のため、万人は一人のため、医療生協のまちづくり―WASH運動の展開―」と題した講演

と運営委員の高須賀さん、井村さんを交えたディスカッションが行われました。

冨長さんは、北欧の福祉の現場で学んだ「市民参加」の理念と阪神大震災の現場の経験から「ボランティアと住民同士の協力による福祉」という面から「まちづくりは人づくりだ。人づくりが出来なければまちづくりはだめになる」という考えを述べられました。

また、「高齢化時代の到来と共に行政と民間及び住民が、高齢者のための保健・医療・福祉のネットワークをつくっていくことが大切である」と話されました。

第二時限目は、大分県湯布院町でレストラン&ギャラリー「南の風」を経営されている田井修二さんの「終わりなき創造―湯布院まちづくり物語―」と題した講演と、運営委員の守谷さん、亀岡さんの二人を塾頭に、ディスカッションが行われました。

田井さんは、クラシックギタリストとして湯布院音楽祭に参画したのがきっかけで、湯布院のまちづくりに関わってきた一人です。

湯布院のまちづくりは、「花を咲かせるより根を肥やせ」で行われてきたということでした。そして、民間（住民）主導型で、町のイメージづくりを進め、年間四百万人が訪れるスモールビジネスのできる町になったということでした。

また、これからのまちづくりは、「まちづくりの根っこを研究する必要がある」ということも言われました。

第三時限目は、前瀬戸田町長和氣成祥さんの「まちづくり文化事業・瀬戸田町の歩み」と題した講演と運営委員の若松さん、大本さんを塾頭にディスカッションとなりました。

和氣前瀬戸田町長は、本格的な音楽ホール「ベル・カントホール」の建設や島ごと美術館構想等、文化の薫るまちづくりを推進してきたリーダーです。

和氣さんは、事業を成功させる上で大事なことは、「住民とのコミュニケーションをしっかりとることである」と言われました。

また、「一流を演出し、マスコミ等をうまく利用することにより、町のイメージアップを図り、住民が町に自信と誇りを持てるようにする。そして、イベント等で交流を推進し、情報収集の場とすると共に、情報発信の場にしてしまうことも大切なことである」と話されました。

創意工夫のあるまちづくりを行うためには、人材育成が大切であり、「マニュアル主義のマイナス思考では地域の個性やイメージを創造することはできない。プラス思考の人材を育てなければならない」とも言われました。

終わりに

七時間という長丁場のフォーラムでしたが、中身の濃い内容だったので、充実したものになった様に思います。特にまちづくりを進めていく上で、人材育成の重要性をさらに強く感じました。

最後に、このフォーラムを開催するにあたり、何かとお世話になりました関係各位の皆様にお礼申し上げます。

地域を生きる

地質を通したまちづくりにかかわって…

城川町地質館学芸員　高橋　司

城川町は、四国の山奥にある小さな町ですが、他の地域には見られない変わった地質構造をしています。また、西日本では最も古い約四億年ほど昔の化石や岩石が分布することでも広く知られています。その特異な地質は城川町がまだ黒瀬川村と名乗っていた昭和三十一年に「黒瀬川構造帯（くろせがわこうぞうたい）」と名付けられました。

この黒瀬川構造帯は、九州西部から四国を横切り、紀伊半島を経て関東まで点々と細長く続いています。つまり日本各地に城川の旧村名が使われている地質帯が存在しているのです。

…と、前おきはこのくらいにしまして、学生時代に一応、理学部で地質学をかじるにはかじったのですが、ろくに勉強もしなかったせいか地質があまり好きになれず、就職先には地質と全く関係ない商事会社を選んだ私でした。しかし、民間企業の宿命でしょうが、会社の利益をまず第一に考えなければならない世界や、目に見えている単身赴任、仕事以外は帰って寝るだけの都会生活等にイヤ気がさし、城川町役場の試験を受けて昭和五十九年三月にUターンその　後は一生懸命やればやっただけ住民の皆さんに喜んでもらえる地方行政にようやく自分の落ち着き先を見つけて仕事をしておりました。ところが、「偶然」とか「たまたま」と言う言葉は、この為にあるのでしょうか。平成二年、先ほど紹介しました城川町の旧村名、黒瀬川村を研究の発祥とする日本第一級の構造帯である『黒瀬川構造帯』をメインにとりあげた施設を造ろうという構想がもち上がりました。

黒瀬川構造帯の研究でわが町にゆかりの深い石井健一博士（当時神戸大教授）と波田重熙博士（当時高知大教授、現神戸大教授）に理事者がお願いして地質博物館建設の話が前に向いて進み始めたのはよいのですが、町にも担当者が必要ということで、私にその仕事がまわってきてしまいました。

「後悔先にたたず」というイニシエの格言どおり、

「しまった！もっと勉強しておくんだった。あの時はあれほど時間があったのに。バカ、バカ。」

と、今日も朝から夜だった状態の生活を送っていた自分の学生時代を悔やんだことは言うまでもありません。

最初は、博物館の建設などという雲をつかむような仕事にとまど

“地球の学習室”　城川町地質館

地質講演会 石井健一博士

うことばかりでしたが、頼みの綱の波田教授とは妙にウマが合い、足繁く高知大学にかよって仕事を進めた結果、なんとか平成四年九月地質館の完成にこぎつけました。そして、同じ月に波田教授の音頭とりで本町にて黒瀬川構造帯に関する国際シンポジウムが開かれ、国内外から約三十名の研究者が地質館を訪れ、施設のスタートとなったのです。

さて、話しを元にもどしますが、日本の他の地域では見られない古くて奇妙な岩石が存在する黒瀬川構造帯も、かつては大陸の形を残していたと考えられています。そしてその大陸は黒瀬川古陸（くろせがわこりく）と呼ばれています。

ところで、黒瀬川構造帯には先に述べたように西日本最古の化石が含まれる地層があり、ここから見つかる古生代シルル紀や続くデボン紀の化石にはオーストラリアや南中国の化石と共通な種類が多いことがわかっています。たとえば、サンゴや三葉虫（サンバムシ）ではなくてサンヨウチュウ）、顕微鏡でしか見ることのできない小さな化石の放散虫（ホウサンチュウ）も例外ではありません。また、岩石のなかのある鉱物を調べて、その石ができたときのおおよその緯度を推定する「古地磁気学（こちじきがく）」といわれる研究もさかんに行われるようになってきました。

そういったいろいろな研究では黒瀬川古陸は、今から四億年ほど前にはゴンドワナ大陸と呼ばれる大陸の中のオーストラリアや南中国の近くに存在していた可能性が高いと伝えています。ゴンドワナ大陸とは、現在の南米、アフリカ、オーストラリア、南極大陸、インド半島などが一つになっていた巨大な大陸です。二億年ほど前から分裂をはじめました。南米とアフリカが分かれて、その間には太平洋がひろがったり、インド半島が北上してアジア大陸にぶつかったためにヒマラヤ山脈ができたことが知られています。

現在では、黒瀬川古陸もゴンドワナ大陸のかけらだと考えられ、さまざまな研究がなされています。城川になじみの深いこの偉大な地球の遺産を広く紹介し、地球のダイナミックな営みや地球環境について楽しく学んでいただく場所が城川町地質館です。

地質学というと一般的にはなじみの薄い分野ですが、化石や岩石、美しい鉱物などにふれながら太古のロマンを膨らませるのも楽しいもの。城川町地質館は町立の小さな施設ですが、恐竜の卵をはじめ興味深い標本や映像を通して遠い昔の地球に思いを馳せることかできる〝地球の学習室〟です。

職員数も限られている小さな町のこと。地質館専従の職員として仕事をすることはとうていできませんが、住民の皆さんや町の子どもたちに、わが町が地質学の上で大変重要な位置を占めていることと、自然の素晴らしさ、石や化石に対する興味を持ってもらえるよう、あせらずに少しずつ努力していきたいと思っています。

館内展示風景

風おこしのちかい

「まちづくりセカンド・ステージ『地域政策研究会』起動の提言」

えひめ地域づくり研究会議運営委員
渡辺浩二

愛媛新聞三月九日付け社説によれば、この我々の「えひめ地域づくり研究会議」に対するコモンセンスとして、「'96総会フォーラム及び十ケ年の歩み」を総括し、「ボランティア組織でもある研究会議がこの十年に培ったことは、個別に行われていた県内各地の地域づくりをネットワーク化させたことだろう。」と、レーゾンデタ（存在理由）については、一応の評価を得ており、ひとまず初期の目的を達成したといえよう。

しかしながら、同社説では、我々が常々自己批判している、地域づくりのありようとしての全体的画一化やマンネリズム、横並び一線のむらおこし同好会化傾向、お祭り騒ぎのイベント一辺倒で、産業おこしにつながらないジレンマも、鋭く指摘されている。

加えて我々も含めた愛媛の地域課題として、時代の要請である県境を越えたネットワークの構築、周辺地域との広域的な連携と交流の実現化、さらには均質化を打破した個性的地域づくり連合（inter-region構想）さえサジェッションされているのである。

インター・リージョンの概念は、広義に「インターネットと同様に、国内外各地域で蓄積されている個有の風土・人・物・歴史・情報などの価値実体が、リンクして各地域同士または発信者同士でダイレクトに情報発信、利用協力、相互交流できる、高度な地域間双方向活性化方策」と解釈され、地域づくりの新指標たりうると予想される。

さて、これまでの当会議十年の歩みが、県内組織・人・情報のネットワーク化に奔走したファーストステージとして捉えるならば、今後二十一世紀初頭にかけたセカンドステージは、「魅力ある個性的地域づくりを志向する者・団体・リージョン同士の交流、研鑽、学び合いによって創出される、より質的向上と深化を遂げた相互文化の陶冶」を、前提目的とした、「出会いから連携への発展」というまちづくり戦略が想定されよう。

そこで、「歴史の必然ステップ、成長の変節点での路線闘争」ともいえる重大局面を迎えるにあたり、一関係者として私見を述べさせていただくならば、異業種交流のるつぼである当会議の核分裂こそ、当然ともいうべき内在的パワー及び問題性の噴出現象であって、活発・積極的議論の場の促進こそが、当会設立の趣意に沿うものである。

具体的には、徹底的論議を経て、私は、新年度早急に賛同者を募り、当会議内外の産・学・官・民有志で参画する「地域政策研究会（仮称）」という、地域活性化方策研究のためのスペシャリスト養成専門部会を創設すべきであると考えている。

というのも、現代日本社会のフレーム変動の中で、当研究会議が果たすべき役割としての、「外部社会環境変化への対応機能」が、ここ最近特に遅れてきているのではとの危惧の念が高まり、「組織論」の抜本的早急な是正、シフトチェンジが必要ではないかと、考えるに至ったからである。

それは、国の四全総九四年六月総合点検報告書によれば、わが国を取り巻く経済社会情勢を、「新しい時代の始まり」と指摘し、次の五つの特徴的トレンドを提示している。

第一に、「地球時代」であり、全ての分野にグローバリゼーションが進み、国民の日常生活は、毎日の国際情勢に左右される時代となっていることである。

第二に、「自然再確認の時代」であり、いわゆる地球環境問題、自然生態系の保全を無視しては、

いかなる開発も、人類をふくめた全生物の滅亡を招来するという、危機的社会を迎えているということである。

第三に、わが国の「人口減少、少子化、超高齢化社会」の問題であり、憂うべき時代に陥っている。過疎地域では、集落の存続自体が崩壊している地域も散見できる。

（追記、国土庁では、過疎地域とはいわず、多自然居住地域と呼ぶそうです。渡辺）

第四に、「新地方の時代、地方分権の時代」であり、まさに地域が主体となって活躍しなければ、その当該地域（市町村）自体が生き残れない、知恵比べ、力比べの地域間競争の時代に突入していることである。

そして第五が、「本格的な高度情報化社会の到来」の社会現象である。今までに想像もされなかったスピードでの、情報化された新世界の展開が、日夜構築されている時代となっている事実である。

これら我々の日常生活に押し寄せる、数々の新しい「波」に対し、わが研究会議は、果たして、客観冷静に現象を把握し、情勢を正確かつ科学的に分析し、問題点を抽出した上で、「自らの地域課題」と設定し、迅速かつ的確な対応処理策の検討協議、提案具申、ＰＲなど問題解決に向けての真摯な努力を、現在まで積み重ねてきたであろうか。

当会議設立から今日まで十カ年たずさわった者の一人として、努力皆無と断罪はできないが、確かに「愛媛（を代表する）地域づくりの研究・会議」という大きなテーゼに対しては、ボランティアでもあり、現在までの理念と現実のギャップは否めない。

さらに加えて、ハイウェイや架橋で結ばれてゆく昨今の近隣諸県、あるいは当愛媛県施策の動向に対しても、えひめ住民側にスタンスをとった、アンテナを網羅して、当会議の特性＝官民パイプ役機能を発揮してゆくべきではなかろうか。

ちなみに、隣県高知の橋本知事提唱の「新・高知づくり8プラン」は、極めて私には、魅惑的地域活性化方策に映って仕方がない。

一、チャレンジする事業家の育成
二、情報系ビジネスの創出
三、個性あふれる人材の養成
四、まごころあふれるコミュニティの創造
五、全員参加で魅力あるまちをつくる
六、いなかの自然と文化のすばらしさを発信する
七、人とものとが往きかう開かれた県にする
八、土佐県民をバーチャルに拡大する

そして、驚くべきことに、知事自らが先頭に立って、「県民インターネット一人一ページ運動」を展開しているという先進事実である。私は、人に善いことならば、行政だろうが民間だろうが、どちらがすべきかの順序、優劣は、本来存しない、と思う。

さて、この現代社会の大命題、「超高度情報化社会」到来の課題であるが、かつての画期的発明「自動車・飛行機・電話・テレビ」を超えた社会変革をもたらしている。

この高知県の試みは、インターネットによって可能となった大容量・双方向の通信を利用し、遠隔地・僻地においても、距離と時間に制約されることなく瞬時に「世界」とアクセスでき、政治・経済・文化・学術・福祉等全ての分野で、創造的交流を実現できる最強マルチメディア構想であり、「知価革命」時代到来を睨んでの布石といえよう。

このため地方圏においても、インターネット活用で、地域産業の高度化・効率化・活性化が図られることはもちろん、現在大都市圏に集積されている高度情報、都市型文化サービス、本社機能など中枢機能が、地方圏に分散することが促進され、いわゆる中央と地方の主客関係の逆転現象さえ発生してくるであろう。

ニューヨーク・東京・松山・Ｘ村が同時同列で、それぞれの特異性を活かしながら、共通のテーマについて研究・協議・創造して競い合いながら、共存してゆく「共生のシステム＝リンケージの時代」に突入している現代の歴史的事実に、我々の生の意義の感慨を覚えずにはいられない。

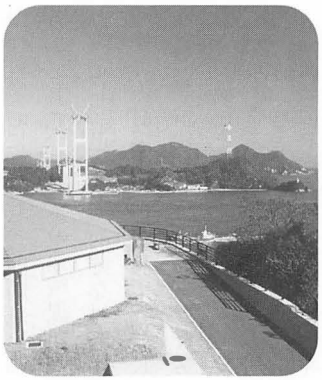
瀬戸内の多島海景と来島大橋の雄姿
『来島海峡展望館』
今治市

今治市の北、糸山公園の眼下に広がる来島海峡。日本三大急潮の一つに数えられ、最速十ノット（時速十八km）にも及ぶ潮の流れは各所に渦を作りだしています。古来より海の難所として、また来島水軍の本拠地としても知られてきました。現在、この海峡に世界初の三連吊橋となる来島大橋の建設が進んでいます。来島海峡展望館は、美しい島々・渦潮逆巻く来島海峡の自然美と来島大橋の人工美が織りなす絶景を望めるビューポイントに平成八年四月オープンしました。館内の来島大橋工事展示室では科学技術の粋を集めた架橋工事概要を展示し、実物と見比べながら世紀の大工事を実感することができます。開館以来わずか一年で来館者十九万人を越える今治で一番注目されているスポットです。平成十年度の瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）の完成に向け、日々変わりつつある来島大橋と四季折々の美しさを魅せる来島海峡をお見逃しないよう、是非一度ご来館下さい。

〈開館時間〉 午前十時～午後六時（三月～十一月）
午前十時～午後五時（十二月～二月）

〈休館日〉
・年末年始のみ休館（十二月二十九日～一月三日）

〈問い合せ先〉
・来島海峡展望館
☎〇八九八－四一－五〇〇二



菊間の「和」のシンボル
『瓦のふるさと公園』
7月オープン予定
菊間町

JR菊間駅東側に作られた、人々の様々な出会いや憩いの場である『瓦のふるさと公園』は、新しい菊間のシンボルです。

公園内にある中四国で唯一の瓦資料館である「かわら館」では、鬼瓦をはじめ各種の瓦製品や瓦に関する歴史的資料、郷土出身芸術家の美術品（絵画・書）、工芸品などが展示されています。他にも瓦作りを実習体験できる実習館、瓦で作った十二支の彫像を配置する干支ロード、瓦のモニュメント等、瓦を基調とした公園となっています。

〈主な施設〉
・展望時計台
・コンビネーション遊具
・ローラー滑り台
・日本庭園
・フラワーガーデン
・多目的芝生広場

このように様々な施設があり、家族揃って気軽に楽しめる公園となっています。

是非一度、ご来場・ご来館下さい。

〈問い合せ先〉
・菊間町役場
☎〇八九八－五四－三四五〇
FAX〇八九八－五四－五二五四

交流促進センター『花の森ホテル』4月27日オープン

中山町

中山町栗の里公園の中に交流促進センター「花の森ホテル」がオープンします。

当施設は都市住民との多角的な交流と地域の活性化を目的とした宿泊研修施設としてどなたでもご利用いただけます。

〈宿泊〉

・お一人様六千円より

和室十室、洋室八室

〈研修・宴会〉

・六十名収容の研修室

パーティーや同窓会等のいろいろなお集まりにご利用下さい。

〈レストラン風花（ぶーけ）〉

・中山町で採れる四季折々の新鮮な野菜を使った和風洋懐石料理。

味覚の楽しさと彩りの美しさをご体験下さい。

夕食三千五百円より

※レストランだけでもご利用いただけます。

〈花の湯〉

・トロン鉱石温泉

サウナ付展望浴場からは自然の山並みがご覧になれます。

〈ご予約・問い合せ先〉

・花の森ホテル

☎〇八九―九六七―一六六六

『フラワーパークおおず』オープン

大洲市

大洲市西大洲の国立青年の家北側に、新しいタイプの公園が完成いたしました。ご来場をお待ちしております。

〈主な施設〉

・フラワーエリア

一ヘクタールの大きな花畑に、春と秋、花が満開になります。

・ファームエリア

九十六区画の体験農園と休憩施設があり、農業の体験が楽しめます。

・昆虫観察所とビートルエリア

夏には、人工的に孵化させたかぶと虫を観察できます。

・花見の丘・イベントエリア等

〈開場時間〉

・午前八時三十分～十七時

（ファームエリアを除く）

〈休場日〉

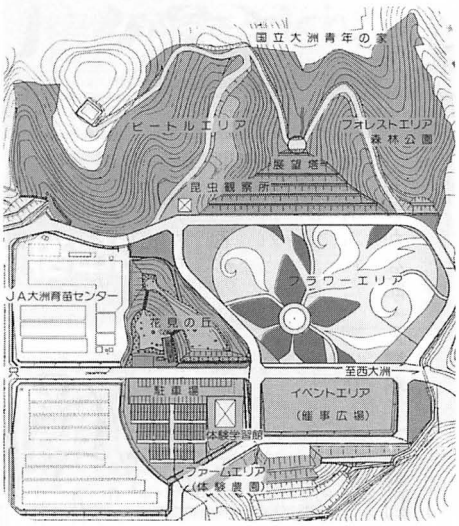
・年末年始

（十二月二十九日～一月三日）

〈問い合せ先〉

・フラワーパーク おおず

☎〇八九三―五九―一一五〇



湯煙のむこうに湖が見えます『交流促進センター鹿野川荘』オープン

肱川町

肱川町の鹿野川ダム湖畔に、交流宿泊施設「肱川町交流促進センター鹿野川荘」が完成し、このほどオープンしました。

この施設は、交流活動を促進するとともに住民の保養施設とするため整備したもので、地域の食材を提供するレストランや、特産品販売所、大・小会議室などを設けています。

宿泊棟は、和・洋合わせて十二部屋あり、定員が三十一人です。浴場には、湯治の湯として有名な「小藪鉱泉」を引いています。そして入浴後にマッサージをしたりテレビを見ながらゆっくりとくつろげます。また、サウナ風呂や打たせ湯のほか、カラオケ設備付きの娯楽室も整備しております。

お風呂に、お食事に、ご宿泊に、会議・研修に、ぜひご利用ください。

なお、この施設はＪＡ愛媛共済連指定の宿になっています。

〈入浴料〉（十一時～二十二時）四〇〇円

〈問い合せ先〉

・肱川町交流促進センター鹿野川荘

☎〇八九三－三四－二〇〇〇

「虹の森公園」オープン

松野町

日本最後の清流と呼ばれる四万十川の最大の支流のひとつ広見川のほとりに、「虹の森公園」がオープンしました。

この公園は、松野町が平成六年度から交流人口の促進と地域経済の活性化を目的に整備していたもので、森の国まつのの新しい観光拠点として期待されています。

メインとなる施設は、四万十川の自然と生物をテーマにした「四万十川学習センターおさかな館」で、四万十川の怪魚アカメや特別天然記念物のオオサンショウウオや世界中の大河や清流から集めた巨大な淡水魚なども飼育しています。

この他にも、リサイクルでオリジナルガラスを創っているガラス工房や、新鮮な野菜や果物、地元の特産品等の販売所、川の流れとふれあえる芝生広場などがあり、虹の森らしく色々な魅力があふれた公園になっています。

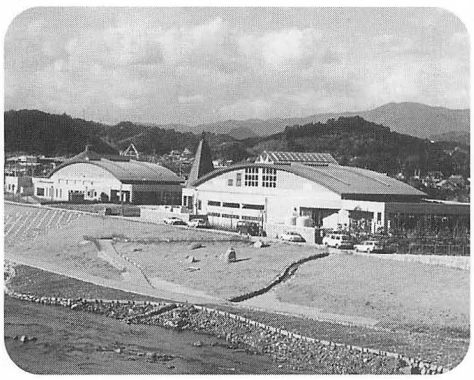
〈おさかな館　入場料〉大人800円　子供400円

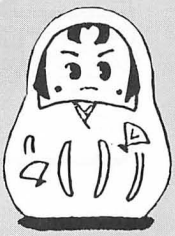
〈休館日〉水曜日

〈問い合せ先〉

・虹の森公園

☎〇八九五－二〇－五〇〇六





平成９年度事業計画

㈶愛媛県まちづくり総合センター

㈶愛媛県まちづくり総合センターは、県内各地で進められている地域づくり活動の支援機関として、潤いと活力に満ちた新しい愛媛のくにづくりと21世紀の愛媛を創造していく基盤づくりのため、交流、連携の時代に対応したまちづくり等に視点をあて、平成９年度の事業計画を次のとおり定めました。

平成９年度事業計画の概要

○　情報誌『舞たうん』の編集・発行
　まちづくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワーキング誌として、引き続き発行する。
　なお、誌面構成、内容の検討を行い、一層の内容充実に努める。

○　新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供
　県内各地からのまちづくり情報の個別需要に対し、新鮮かつタイムリーな情報を提供する。

○　『全国まちづくり情報』のデータベースによる情報提供
　「全国まちづくり情報」を活用し、各地の地域づくり実践者や関係機関団体等からの照会に応じて、必要な情報を提供する等、情報提供活動の充実を図る。

○　情報収集用刊行物の整備
　まちづくり関連の各種刊行物と、「まちづくりビデオ」の整備を進め、引き続きまちづくり情報の蓄積を図る。

○　『まちづくり調査研究事業』の実施
　センターのまちづくりに関する調査研究機能を充実するため、まちづくり活動に有用なテーマを選定し、調査研究活動を進め、県内各地へのまちづくり情報の積極的な提供活動を行う。

○　イベント情報誌『えひめイベントＢＯＸ』の編集・発行
　平成９年度中に県内で開催される、あらゆるジャンルのイベントを保存活用タイプの情報誌にまとめ発行する。【４月発行】

○　『地域づくり研究サロン』の開催
　まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について、深く検討を重ねていくため、専門家をアドバイザーとしたサロンを開催する。

○　『ふるさとづくり文化講演会』の開催
　地域住民を対象に、地域固有の歴史や生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくりの先駆的実践者等を招いての講演会を、地域に即したテーマを個別に選定し開催する。

○　『えひめ地域づくり研究会議フォーラム』の開催
　えひめ地域づくり研究会議と共同して、フォーラムを開催し、地域づくりに関心を持つ人々の学習、研究活動を積極的に支援する。

○　『地域づくり交流促進事業』の実施
　県外の地域づくりグループ等活動者を県内に招き、県内の地域づくりグループと交流させることにより、まちづくり活動者の人材育成とネットワーク化を図る。

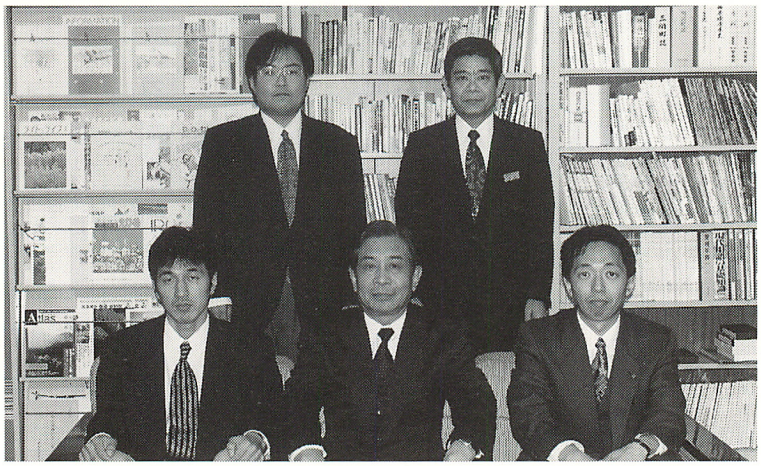
○　『まちづくり研究アシスト事業』の実施
　地域において自主的に活動するまちづくり研究グループは、地域活力と新たなまちづくりを創造していくための貴重な存在であることから、当該グループ等が実施する学習・研究活動並びに広域的なまちづくりイベント等の開催を支援し、ひとが育つ環境づくりを進める。

○　地域づくり人材育成関係事業への協力
　行政の行う地域づくり人材育成関係事業に積極的に参加・協力し、人材育成とネットワーク化を促進する。

㈶愛媛県まちづくり総合センター

人　事　消　息

■平成９年度　センター職員（☆印は新しいスタッフです）

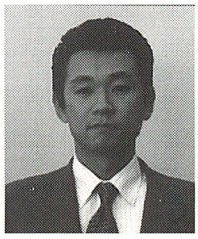


（前列左から）☆研　究　員　伊手　博志（津島町）　所　長　渡部　正人　☆主任研究員　藤田　享（愛媛県庁）

（後列左から）研　究　員　稲田　紹　研　究　員　井上　正男

●４月１日付けで、主任研究員・研究員として勤務された２名の活動の拠点が変わりました。これからもよろしくお願いいたします。

中村　博之（愛媛県庁）



大谷　基文（双海町）

申分なき日和得て初夏の旅　高濱年尾

海や山や川に出かけて自然に親しんだり、旅行等にでかけたりするには、絶好の季節が到来しました。天気のいい日は、家族で、友達どうしでかけてみませんか。

ストレス退治対策の３R

1．Rest（休息）
2．Relaxation（くつろぎ）
3．Recreation（気晴し）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動の記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係まで
〒７９０　松山市三番町８－234
愛媛県生活保健ビル三階
㈶愛媛県まちづくり総合センター
ＴＥＬ　０８９（９３２）７７５０
ＦＡＸ　０８９（９３２）７７６０

発行／平成九年四月二十日
㈶愛媛県まちづくり総合センター
㈶愛媛県市町村振興協会